

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02832

研究課題名(和文) 中世西日本海水運と山陰地域の流通構造に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Water Transport in the Western Japan Sea in the Middle Ages and the Distribution Structure of the Sanin Area

研究代表者

長谷川 博史 (HASEGAWA, Hiroshi)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：20263642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世の山陰地域の流通構造について、西日本海水運との連関性を追究することによって、明らかにした。たとえば、富田城下町は、戦国大名尼子氏の拡大によって、16世紀前半に急速に発展し、鉄の加工を通して内陸部と海を結びつけた。また、杵築門前町は、16世紀後半に、石見銀山の開発の影響を受けて急速に発展し、鉄の積み出し港としても重要な役割を果たしたので、内陸部と海を一層強く結びつけた。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the distribution structure of the San-in region in the Middle Ages by studying its linkage with the water transport in the western Japan Sea. For example, Toda castle town developed rapidly in the first half of the 16th century with the expansion of the Sengoku Daimyo Amago clan, and connected the inland and the sea under the influence of iron processing industry. In another example, Kizuki, the town in front of Izumo Taisha Shrine, developed rapidly under the influence of the development of Iwami-Ginzan silver mine in the latter half of the 16th century, and also played an important role as an iron shipping port, so it tied the inland and the sea more strongly.

研究分野：日本中世史

キーワード：中世 日本海水運 山陰地域

1. 研究開始当初の背景

本研究が検討対象とする西日本海とは、若狭と対馬によって区分される空間領域を指している(井上寛司「中世西日本海地域の水運と交流」『海と列島文化2 日本海と出雲世界』1991年)。

西日本海は、日本列島中央部の経済的・社会的・政治的構造の特徴や変化に、強い影響をおよぼしていた側面がある。なぜならば、京を含む西日本各地と大陸を結ぶ経路として、位置関係や海流、対馬・見島・隠岐島など島嶼の存在など、すぐれた地理的条件を有していながら、天候や船舶技術発達過程における規制を受け、また陸路が優越する律令国家の交通体系にも強い影響を受け、制度的な条件や、広域経済からの影響を、独特な形で反映してきた歴史的経緯があるからである。西日本海とは、たとえば平安期日宋貿易の構造的特質(渡邊誠『平安時代貿易管理制度の研究』2012年)や、中世後期の大陸との通交関係(関周一『中世日朝海域史の研究』2002年)16世紀の産銀輸出などが、日本列島の経済・社会に与えた影響について検討するためにも、重要な鍵を握る海域であったと考えられる。

中世西日本海水運に関しては、井上寛司氏の研究(「中世山陰における水運と都市の発達」有光友学編『戦国期権力と地域社会』1986年、および前掲井上氏論文)によってすでに基本的な事象や特徴が示されており、荘園公領制の年貢輸送ルートを起点に廻船ルートが形成されていく過程が解明された。美保関や隠岐島を結節点として、広域的な複数の「ルート」が存在したことが指摘された。それをふまえた研究代表者の研究では、中世後期において、より日常的で広域的なネットワーク状の交流・物流が深められていったことを明らかにした。15世紀には、西日本海西部海域を中心として、通交関係・商業取引・海賊行為を示す史料が増え、日常的な交流が広域化したこと、宍道湖・中海の港湾都市(白潟・末次・平田・安来・米子)が形成され、16世紀には西日本海沿岸の港湾都市群が全盛の時代を迎えたことなどを、絵図史料、地形、地名、棟札や金石文、石造物を用いて検討してきた。

2. 研究の目的

しかし、内陸部を含めた流通構造や、それらと日本海水運との連関構造については、課題として残されていた。なかでも、中国山地に特徴的な鉄や、石見銀山に代表される銀、都茂丸山鉱山をはじめとする銅など、金属を中心とする地域資源の存在が、全体の構造や変化に大きな影響をおよぼした点は看過できない。中世金属資源の流通は、考古学分野を中心とする著しい研究の進展により、ますますその重要性が注目されているところである(竹田和夫編『歴史のなかの金・銀・銅』

2013年、小野正敏他編『金属の中世』2014年)。とりわけ山陰地域の金属資源が生み出した人や物の流れは、日本海水運の展開と密接に関わり合いながら、地域社会全体に大きな影響を与えた可能性が高い。その点を、明らかにする必要があると考えられる。また、近年の発掘調査の成果によって、西日本海水運自体のとらえ方にも見直しが必要となってきた。中世前期において、沖手遺跡の歴大な舶来陶磁器の意味は、年貢輸送ルートの形成のみでは説明できない。また、中須東原遺跡・今市遺跡などを擁する古益田湖(石見潟)の港が、明の日本研究書に表れない理由も定かではない。本研究は、以上のような課題を解明するために、中世山陰地域の流通構造とその展開について、金属資源の生産・流通とその変化に着目する観点から、西日本海水運との連関構造を追究し、明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

金属資源や流通構造は、いずれも中世の文献史料がきわめて限られている。そのため、紙に書かれた中世文書のみならず、棟札をはじめとする金石文についても、情報を収集した。

また、島根県教育委員会、鳥取県教育委員会、安来市教育委員会、益田市教育委員会の協力を仰ぎ、関連する出土遺物・石造物など非文字史料について情報を収集した。具体的には、中世製鉄遺跡群・富田城跡・富田川河床遺跡、大年ノ元遺跡・沖手遺跡・中須西原遺跡・中須東原遺跡、石見銀山関連遺跡における最新の成果を得た。

具体的には、富田川河床遺跡・大山寺僧坊跡遺跡・石見銀山遺跡・温泉津・益田の出土遺物見学や現地調査、浜田・鞆ヶ浦・出雲大社周辺・宇籠・奥出雲町・美保関・安来津・米子、但馬北部の海岸地域の現地調査を行った。また、中世物流拠点を解明するための基礎資料として、広島大学所蔵『中国五県土地・租税資料文庫』の、以下のような明治初年の切図を調査した。

米子町略図

能義郡広瀬町地図(広瀬村・町帳村)

能義郡元広瀬市街地図

出雲国能義郡富田村絵図

大田市地図(大森村)

漣摩郡大森市街地図

大森市街図

漣摩郡温泉津町地図(温泉津村・小浜村)

以上の点をふまえたうえで、富田城下町、杵築門前町、石見銀山町について、都市・港町およびその周辺地域の景観や構造の復元的な考察を進めた。特に、絵図・地名・地籍図や、歴史地理学の成果と方法を効果的に活用するよう努めた。

4. 研究成果

(1) 16世紀中葉の富田城下町の地域的・歴史的特徴

政治的な実効勢力の拡大が流通構造の変化に反映されるほどに大きな規模で展開した事例が、尼子氏と富田城下町であると考えられる。近年、富田川河床遺跡の出土遺物が再検証され、大量の貿易陶磁群が16世紀中葉から突如として現れることが明らかにされた。天文年間(1532～1555)に尼子氏が急激な拡大を遂げ、それまで対立的な関係の守護勢力同士が割拠していた西日本海沿岸諸国に強い影響をおよぼしたことは、その本拠が所在し、山陰海岸の中央部にあたる島根半島周辺(とりわけ美保関・富田)に、商人たちが集まりやすく、物流拠点を生じやすい条件をつくり出した側面があると考えられる。尼子氏の本拠であった月山富田城跡は、標高こそ200mに満たないが、天候さえよければ能義平野、中海、弓ヶ浜半島、美保関、美保湾、島根半島東端を、一望の下に見渡すことができる。月山富田城とその城下(富田川河床遺跡の所在地)は、たしかに内陸部の軍事的・政治的拠点ではあったが、同時に日本海水運・内海水運・河川水運の拠点としての側面を併せ持っていたと言っても過言ではない。

また、その当時の尼子氏が、京都との結びつきを重視した点も見逃せない。尼子氏が京都と最も強く結びついたのは、天文年間(1532～1555)末期のことであり、細川氏綱への支援や、三好政権の確立により、尼子氏の京都における名声は、一時的に最も高まった。京都系土師器の集中的な出土は、そのことを裏づけるものであると考えられる。

したがって、16世紀中葉において、富田周辺から貿易陶磁が急激に増加しはじめたことは、尼子氏の拡大が富田の経済的求心性を高め、西日本海を介して流入する商品・文物が増加したことや、尼子晴久が京都との関係強化をも図る志向性を有したことが、いずれも影響をおよぼしたものであると推測される。

(2) 富田城下町を事例とする中世物流拠点の復元的考察



図1 旧富田町関係遺構・地名及び旧河川想定図

富田川河床遺跡の出土品からは、中世に遡る遺物の出土が特定の場所に集中している。それは、新宮橋上流附近にあたるSK015・SD027・SK041・SE024の4カ所である(図1参照)が、最も古いものでも16世紀中葉までしか遡れない。SK015は、土壌遺構であり、出土量が最も多い。SD027は、石積み溝遺構、SK041は、土壌遺構である。最も上流に位置するSE024は、石積み井戸遺構であり、出土遺物の年代が最も古い。似たような規格の陶磁器がまとまって出土している事例があり、商品の集積する物流拠点であった可能性が指摘されている。

さらに、明治初年の地籍図(広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収)によれば、富田城下町周縁に市場地名を確認できる。

一つは、植田村・中嶋村境にみられる「字三日市」である。これは、文明8年(1476)の「三日市」の遺称地と考えられる。この場所は、能義平野が下流に向けて一気に広がる部分にあたっており、富田川の流路と、東側の丘陵北端沿いの道が交錯する場所であったと推測される。富田城下町との直接的な関係は明らかでなく、おそらくその周縁から郊外に位置して、間接的な影響関係にあった物流拠点と推測される。

もう一つは、古川村にみられる「字市場」「字紅屋」といった地名である。これは、従来全く知られていなかったものであるが、絵図に記された地割の痕跡は、現在でも現地において確認することができる。この辺りが、富田城下町の北東側の境界であった時期があったのではないかとと思われる。「紅屋」という地名との直接の関連は不明であるが、寛文8年(1668)広瀬町屋敷帳(広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収)の魚町に「べにや長右衛門」(213)を確認できる。



図2 古川村絵図の字名「市場」「紅屋」

最後に、新宮村(明治8年以降は牧谷村・山形帳と合併して富田村となる)の町帳村境に「後谷元市前」という地名がみられることである。新宮谷の入り口に当り、また古川村から才の峠を越えて来る道が交錯する部分にあっている。富田城下町の南東側の境界

に位置した時期があったとも考えられる。

富田城下町の市場の所在地は、長年にわたり謎であるとされてきた。「三日市」の存在は比較的早くから知られていたが、それは富田城下町の市場というよりは、密接に関連する郊外の物流拠点であったと思われる。しかし、本研究がはじめて明らかにした古川村「市場」や新宮谷入口の「元市」は、いずれかの時期に富田城下町を構成する物流拠点であった可能性が高い。富田城下町に直接的に関連すると思われる物流拠点は、中世出土遺品の多い新宮橋上流附近、古川村の市場地名附近、新宮谷入口附近などを想定することができ、おおむねそれらに囲まれた範囲内に、城下町が所在した可能性をうかがわせている。

図1からもわかるように、旧町帳村と対岸の飯梨川兩岸には、現在に至るまで特徴的な短冊形地割が残されている（明治初年の地籍図に「代地」「米成」「的場」「兼尾」「廣嶋」「大道添」「大道端東」と記された場所など）。それらのなかには、寛文6年（1666）以前からのものが含まれている可能性が高い。また、旧町帳村内に現在も残されている道筋は、何らかの歴史的背景をふまえて引き継がれてきたものと思われる（図1の破線）。

さらに、富田川河床遺跡から確認された道筋の一部は、こうした短冊型地割や現在の道筋とも、関連しているように見受けられる。さらに、それらの地割や道筋の基軸として、菅谷口へ至る道筋が重要であったことが推測され、それは明治初年の地籍図に「大道」と記された道であることがわかる。その道沿い（西側）には、寛文8年から明治35年（1902）まで城安寺があり、寛文8年富田庄城安寺領並寺地之替地申之改帳（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」8-163）によって、当時そこが「尼子屋敷」と称されていたことを確認できる。尼子氏滅亡から100年後において、菅谷口へ向かう「大道」に面して尼子氏の館があったと認識されていたことがわかる。いずれも中世富田城下町や17世紀富田町の痕跡ではないかと思われる。

ところで、16世紀前半の富田は、尼子氏の勢力範囲全体の中心拠点であり、西日本海沿岸地域にも影響力を及ぼしうる地理的条件を併せ持っていたと推測される。そのため、1540～50年代の一時期における富田は、出雲国の政治的中心拠点としての役割に加えて、国の枠組みを超えた周辺地域・周辺海域における経済的中心機能をも担う場所であったと考えられる。しかし16世紀後半になると、富田は毛利氏・吉川氏の手により政治的拠点としての役割を変化・縮小させており、経済的には美保関とともに引き続き重要な物流拠点であったものの、杵築・白潟をはじめとする西日本海沿岸の多くの港湾都市が隆盛期を迎えるなかで、相対的にはその地位を後退させていったと推測される。

にもかかわらず、すでに政治的・経済的な中心機能を大きく後退させていた17世紀の富田町に、多種多様な職種の商職人がなお多く居住していたことは、特に注目されることである。中世富田城下町がどれだけの規模であったのかを、彷彿とさせる事実と言えよう。特に、「鍛冶町」を中心に多数の鍛冶職人が集住していたと思われることや、富田川河床遺跡の出土物からは、17世紀の富田町が、出雲国仁多郡・能義郡・伯耆国日野郡など山間部から鉄原料が供給される物流拠点であったことを確認できる。そのような側面は、地理的な条件にも規定されて、松江城下町へ移転するよりも効率的な営業が期待されたことをうかがわせており、中世富田城下町以来引き継がれてきたものである可能性を指摘できる。

（3）16世紀後半の杵築門前町の「発展」

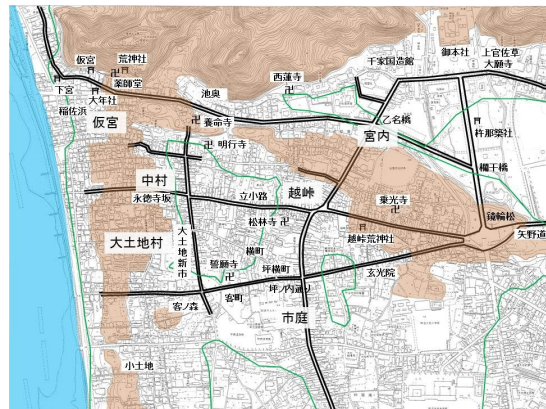


図3 17世紀半ばの杵築門前町

16世紀中期の島根半島には、唐船・北国舟・但馬船など、従来想定されていなかったような遠隔地からの船が新たに多数着岸するようになっていた。特に、東シナ海以西の遠洋航海船である唐船（ジャンク）や、北東日本海海域の船舶である北国舟が、島根半島周辺に頻繁に現れるようになったことは、海域の流通構造が変化していたことをうかがわせている。

したがってこの時期の杵築門前町は、陸路・海路により何処から誰が来訪・来住しても不思議ではない場所になっていたと推測される。こうした物流拠点としての著しい「発展」は、福屋氏の潜伏情報が流れたり、杵築法度に宿泊者の規定が多数を占めたりしたことの、要因や背景となっていた可能性が高い。16世紀中期の杵築法度に、秩序の「混乱」をうかがわせる条文が多数記されていることは、まさに都市的な「発展」がもたらした負の側面を浮き彫りにしている。

このような状況への対応こそが、杵築法度であり、「杵築相物親方」の創出であり、多数の「杵築御蔵本」の設置ではなかったかと思われる。しかも、それらが効果的に機能し続けたとは言いがたい。たとえば、「杵築相

物親方」の存在と活動を示す史料が、弘治～永禄年間（1555～1570年）以外に確認できないことは、坪内氏単独での統括機能の限界性や、新興勢力の台頭により絶えず新たな状況に直面していった16世紀後半の杵築門前町の実情を、うかがわせるものである。16世紀末期において、異様に多数の「杵築御蔵本」が設定された理由も、そのことと無関係ではないであろう。

16世紀後半の杵築門前町（および島根半島周辺）が、著しい「発展」（それと表裏の関係をなす既存秩序の「混乱」）の時代を迎えていたことは、事実であると考えられる。

以上のような杵築門前町「発展」の意味を検討するためには、中国山地や日本海海域における地勢的な位置づけをとらえることが必要である。

まず第一に、中世の斐伊川は主要な流路の一つが日本海に注いでおり、杵築はその河口から程近かったという点である。これは、杵築門前町が島根半島中部・東部や流域周辺の中国山地を後背地域とする都市として機能するために、有利な条件であったと言える。第二に、杵築門前町の所在した島根半島が、もともと西日本海海域の交流・物流の重要拠点であったという点である。ここは、鉄・銅などの地域資源が海路と結びつく結節点の一つであったと考えられる。

産銀輸出の増加に伴い、16世紀後半の石見銀山に巨大な都市が出現したことは、杵築門前町の大きな変貌と全く同じ時期の現象であり、両者の因果関係を示唆している。石見銀山という大消費地への物資搬入や、銀を求める遠隔地からの来訪者の増大は、いずれも山陰地域を中心に地域社会の物流に大きな影響をおよぼした可能性が高い。

特に島根半島周辺においては、すでに存在した鉄や銅をはじめとする地域資源の流れが、新たに生み出された奔流のような銀の流れに巻き込まれて、さらなる活況を呈したものと推測される。また、直線距離にして40km程度の杵築門前町と石見銀山は、東アジア海域全体からみればきわめて密接な位置関係にあったと言える。16世紀後半の杵築門前町は、後背地域資源と銀の流れが交錯し、石見産銀輸出増大からの影響を強く受けた可能性が高い。

以上のように、中世の杵築門前町は、日本海海域や山間地域との結びつきを重要な基盤としながら、石見産銀輸出の増大を契機とする16世紀後半における地域社会全体の流通構造の変化に巻き込まれたことにより、門前町内部においてさまざまな秩序の「混乱」に直面するとともに、物流拠点としての著しい「発展」を遂げたものと考えられる。

（４）結果と意義

中世日本海海域の実態を明らかにしていくことは、日本列島全体の歴史的諸段階をより正確に理解するために、欠かすことのでき

ない問題である。特に、朝鮮半島に近接する西日本海地域の物流の実態解明は、重要な課題であると思われる。

本研究では、特に金属資源の流通と水運との関連性に着目し、西日本海水運と山陰地域の流通構造を検討した。いずれも中世の政治権力や内陸部と西日本海流通との関係を追究したものである。

第一に、九州・朝鮮半島との位置関係から、石見国は古くから対馬・博多などとのつながりがあったものと考えられる。益田の港湾遺跡は、そのことを裏づけている。

また、西日本海地域全体から見れば、島根半島・隠岐周辺がその基軸として大きな役割を果たしたものと思われ、16世紀前半に急激な拡大を遂げた尼子氏の基盤としても重要であったと考えられる。また、尼子氏拡大の結果として、その本拠富田城下町は、経済的にも活況を呈した。富田川河床遺跡において、16世紀中葉になって一挙に貿易陶磁が出現・増加することは、そのことを裏づけている。そして、富田城下町やそれを引き継いだ広瀬町に、きわめて多く鉄加工関連の職人たち（鍛冶師、刀師、磨師）が居住し続けていたことも重要と思われる。富田からさらに上流には、優勢な製鉄地帯の一つである出雲国仁多郡・伯耆国日野郡が広がっており、富田は、鉄流通の拠点として、山間地域と日本海を結び結節点であった。

さらに、16世紀後半からは、石見銀山が巨大な都市として求心力を飛躍的に高めた。16世紀後半の出土貿易陶磁が、石見銀山遺跡に集中していく現象や、杵築門前町の活況と変貌は、そのことを裏づける事実と考えられる。

このように、16世紀中葉から後半、さらには17世紀にかけて、流通構造・社会構造・政治構造が大きく変化していく様相を、物流拠点の形成・展開・変容との関連においてとらえることの重要性は、確認できたものと考えている。なかでも、長年にわたって謎とされてきた富田城下町の「市場」について、その所在地を推測させる地名を確認できた点は、大きな成果であったと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

長谷川博史、出雲尼子氏と芸備地域、芸備地方史研究、査読有、305・306、2017、pp.1-23

長谷川博史、15・16世紀山陰地域の政治と流通、貿易陶磁研究、査読有、36号、2016、pp.15-27

〔学会発表〕(計7件)

長谷川博史、文献史料からみた中世の流通システム、島根県古代文化センターテーマ研究「たたら製鉄の形成過程」第2回客員研究員共同検討会、島根県埋蔵文化財調査センタ

一、2017年3月9日

長谷川博史、月山富田城から松江城へ、城下町科研(研究代表者仁木宏)米子研究集会「中近世移行期の山陰東部における都市・地域・権力 因幡・伯耆・出雲」講演・報告・パネルディスカッション、米子市福祉保健総合センターふれあいの里、2016年11月19日

長谷川博史、出雲尼子氏と芸備地域、芸備地方史研究会大会(招待講演)、広島大学、2016年7月3日

長谷川博史、尼子氏からみた大内氏、大内氏歴史文化研究会、山口県教育会館、2016年3月6日

長谷川博史、15・16世紀山陰地域の政治と流通、日本貿易陶磁研究会、米子市文化ホール、2015年9月26日

長谷川博史、大内氏時代の石見銀山、石見銀山研究会(招待講演)、島根県石見銀山世界遺産センター、2015年6月20日

〔図書〕(計6件)

佐伯徳哉・長谷川博史・山崎裕二・岡宏三・廣澤將城・永瀬節治、いづも財団、出雲大社門前町の発展と住人の生活、今井出版、2018、212

石田雅春・菊池達也・斎藤拓海・柴原直樹・鈴木康之・住友陽文・長谷川博史・平下義記・古瀬清秀・本田博之・三浦正幸・由比義通・渡邊誠 / 他、福山市史 原始から現代まで、福山市、2017、374

光成準治・木村信幸・長谷川博史・津野倫明・脇正典・田中誠二・山本洋・國田俊雄・伊藤創・西尾克己、シリーズ織豊大名の研究4 吉川広家、戎光祥出版、2016、334

井上寛司・川岡勉・原慶三・西田友広・長谷川博史、松江市教育委員会、松江市史通史編2 中世、2016、782

村井良介・松浦義則・木村信幸・和田秀作・柴原直樹・菊池浩幸・馬部隆弘・長谷川博史・山本浩樹・今岡典和・上田祐子、論集戦国大名と国衆 17 安芸毛利氏、岩田書院、2015、425

長谷川博史・谷本進・山崎裕二・西岡和彦・岡宏三・和田嘉宥・廣澤將城、いづも財団、出雲大社の造営遷宮と地域社会(下)、今井出版、2015、202

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 博史 (HASEGAWA, Hiroshi)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：20263642